

あらすじ

アールエス第40話の辺りから雪と1号が無人島に落ちてしまいました

- ・プレイ記録をベースにした二次創作のお話です
- ・もっばらいちやいちゃしているご愛嬌です
- ・具体的・直接的な描写はありませんが×××などしています
- ・CPはリバーシブル

■月■日

晴れ渡りどこまでも見渡せそうな青い空。たてがみと全身の毛を撫でていく心地好い風。砂地、草原、森の中、色とりどりの景色の中を歩いていた。

隣に居るのは『いちごう』というらしい、こいつの仲間がそう呼んでいた。こいつと出会ってから、ぐるぐる螺旋を描く道を長いこと昇って、他のやつらと合流するまで名前を知らなかった。いちごうはおれのことを『ゆき』と呼ぶ、それがおれの名前なんだろう。

二人で出口を探していた。事の起こりは、少し前に下りの階段で足を踏み外して、深い穴に落ちてしまったのだ。こういうことはたまにある。落ち着いて進んで行けば、いつか暗がりから抜けられる。いつも通りこいつに付いて歩いていた。ところが今は様子が違った。いちごうは「おかしい」「何かが違う」と繰り返して口にしていた。

確かに変だと思った。落ちる先は真っ暗で薄気味悪い場所のはずなのに、ここは明るく緑がいっぱいで、波の音も聞こえて気持ち良い。でもいちごうはずっとおかしいおかしいと言いながら困っている。

どうすればこいつはいつもの顔に戻るんだろう。

■月■日

「い……ち、ごう……」

「喋れるようになったのか!？」

背に乗っていた1号が驚いて顔を覗きこんできた。

「あ、あ……」

まだこの体での発声に慣れないが、会話は出来そうではあった。ペガサスの姿に変異して以来、何ヶ月も喋らないで言葉をおぼろしく覚えていた。

鳥が轉り、風が木々の葉を揺らす森の中。立ち止まり、1号は地面に降り、現状について話し始めた。

「オレ達は穴に落ちたけど、ここは奈落じゃないよな? 島だよな?」

「そうみたいだな、周りになんにも見えねえ、絶海の孤島ってやつだ」

「どうしてこんなところに……」

「さあな、そもそも奈落だつてこの世ともあの世ともつかない場所だ、行こうとおもって行けるとこじゃない。他にもアケロンの河、ワームホール、それにルインが異

次元からおとってきたというトンネルだっけか、そういった装置による移動や、おきてほしくはねえけど事故も含めて、いきなりとおくに飛びまうことはある」

1号は神妙な顔で頷いていた。

「でもここは島だ、一周歩けば元の所に戻ってしまう。こんなのは初めてだ」

「そうだな、この数日で外周の行けそうな部分はあるいたな。島のどこかにつごうよく、元の世界にもどれるとびらか装置でもあるか、それともうみになきやならねえか……なんにしてもやっかいだ」

いつもどおりには行かないという認識を共有して、沈黙が流れる。

面倒だし焦りもあるが、そもそも今回の異常戦争絡みでエデンを出てからトラブル続きだ。月に墜ちてそこから生還した経験も有り、もう腹が据わっていた。

「ここに来てからおまえがやってくれたけど、引き続きもどることを目標にみずと食料の確保だ。最低限か、できりやそれ以上を維持しながら探索、これでいいな？」

「ああ」

やるべきことをやろうというしつかりとした表情で1号は応えた。

その日の午後から夕方にかけて、浜辺近くで小高い丘を探して、拠点を置くことにした。ほとんど体一つで落ちてしまい、手持ちが無さ過ぎたのだ。集めた物を置き、体を休める場所が欲しかった。

日が落ちて、焚き火の前に1号は森で取ってきた果実を、俺は草原で見付けた草を食べていた。人間の時にや考えられなかった草食……しかし旨いと感じてしまうのだ。体が変われば食性も変わる、遣る方無い。

「気になっていたんだ……」

紫色の実を齧りながら1号が話しかけてきた。

「なんだ？」

「地球塔で中枢室にたどり着いてから、雪はシキの元へ戻りたかつたんじゃないかって」

「ああ、そのことか……当然もどるつもりだぜ」

「ルイン達といたのは、十二天に追われて身動きが取れなかったからか？」

「それは——」

少し長い説明が必要だった。エデンの遺跡を調査する兄さんに同行し、そこでトレーダーを起動してアケロンの河が流れた。光の河に飛び込んで兄さんは

地球へ。俺も一緒に光の中に入ったがトラブルにあい、月を経由して遅れて地球に辿り着いた。月での顛末は1号への説明は要らないだろう、どういう偶然か一緒にいたのだから。

地球塔で合流してから現地人を連れて塔を昇ることになった。帝国の兄さんと俺、地球人のルインとピアア、月で出会った元人間で今はドラゴンのベガ、そして1号と俺を仇と狙う女Iuka。

普通に考えればまとまることの無さそうなまだらな一行は、兄さんの話した異常戦争終結という目的のために行動を共にし始めた。目指すは6666階の中枢室。

だが地球塔を昇り始めてすぐに、月で懐かしき太陽族の変異細胞に侵されていた俺は変異が始まり、1号は大怪我を追い、動けなくなつた俺達二人は戦線離脱を余儀なくされた。

徐々に人の姿を失い完全にベガサスにメタモルフォーゼした時には、それまでの記憶を失っていた。自分のことも何もかも、そばにいたのが1号だということも分からなかった。俺に呼びかけて一緒に塔を昇ろうとする、ただ一人の存在だった。

それからこの島に至るまで記憶は戻らな

かった。覚えていないのだから人の言葉を話すことも出来なかった。

この間の俺の行動原理はとても単純なものだった。1号が塔を昇るというから付いていく、自分達の身に危険が迫ることがあれば必死に戦う、ただそれだけ。

行動を再開してから中枢室に着くまでの一月弱、獣や野盗の類に襲われて応戦した後、時々1号は脇腹の大きな傷を押さえて顔を擡めていた。不慮の事故とはいえ、自分で撃つことも思い出せずに俺は心配して身を摺り寄せ、1号にも随分と気遣われていた。

励まし合い、助け合い……すっかり懐いてしまっていたことを思い出して気不味くなってくる。

正直、その時は1号がいなくなると困ると思っていた。一人ぼっちになってしまっただから自分とこいつの身を守るために力を尽くした。

今はそんな甘えたことは言わないが、記憶を失う前は万が一変異で命を落とすなどを頼みたいという考えがあった。1号の心からして難しいかも知れないが。

どちらにしても、1号には無事でいても

らいたいことに変わりはない。

「記憶が無くて何も分からない……そうか、生まれたばかりみたいだな」

1号の言葉に頷き、聞かれては都合の悪い部分は適当に端折りながら話を続ける。

中枢室階下でルイン達に危機が迫っていた時も、1号が助けに行こうと言ったので一緒に駆けつけた。彼らを連れ出し、逃げて塔を降りて行き、追ってきた一行の中に兄さんがいたことは今も思い出せている。ただその時は分かっていたいなかった、残念でならない。

天子達と初めて剣を交えることになり、苛烈な戦いぶりに圧倒されて、逃げ延びるのがやっとだった。こちらの方が人数が多かったが、まるで意味をなさなかった。

逃げて逃げて塔を降りて地下に潜って更に降りて、やがてヒルトン炭坑にまで到達した。兄さんが目的としていた場所、兄さんと来るはずだった場所。

「落ち着いているんだな」

比較的冷静に話す俺が、1号には意外らかった。

「きおくももどつたし今の状況も把握してる、きもちの整理はつけたさ」

焚き火の中で枝がパチパチと音を立てて

爆ぜる。1号は太い枝を火の上に乗せて足した。

「いつ記憶が戻ったんだ？」

「これからはなす、だまって聞いている」

ヒルトン炭坑を守護するオクタビーの騎士達と邂逅し、まだ兄さん達はこちらに追いついていないというタイミングで、階段の大穴から落下した。1号に確認しても同じだった。二人揃ってなんとも間抜けなことをしてかしたものだ。

この島に来たばかりの時は、まだ記憶は戻らず意識もどこか混濁していた。次第に混濁が深まり、白い濺みの中で記憶が閃き出した。最初は他人事のように思っていたが、少しずつ自分の記憶なのだと実感していった。

自分が何者なのか。変異してベガサスになったこと、変異後の出来事も明確に思い出せた。これだけの大事にも関わらず、不思議とひどい混乱やショックは無かった。

我を失ったような状態になっていたことは悔しい。意識がはっきりしていれば、せめてもう少し早く思い出せればと何度思ったことか。

塔で追われながらも、兄さんと直接戦うことにならなかったのがせめてもの救いだ。

こうして記憶が戻ってきたのも幸いだ。ここから抜け出したら兄さんの所へ戻ればいい。

こちらは一通りを話し、1号は長い話を聞き終える頃には、双方疲労と眠気に覆われていた。焚き火の始末をしてその場に横になり、深い眠りに落ちた。

■月■日

雪とこの島で暮らし始めて分かったことがある。ここは無人数島のようなのだ。

島に来てからの数ヶ月、方々を歩き回って探したが人間は見付かっていない。難所が多くまだ全てを探索しきれてはいないが、出会うのは虫や獣、それから亡霊ばかりだ。人間だけではない、地球塔へ戻る手掛かりもまだ得られていない。

こんな暮らして思いつくのは月と地球塔で雪と二人きりになった時のことだ。ただ今回ほど長くはなかったし、今よりもずっと厳しかった。

ここに落ちた時だって最初は衣食住に困る状況だった。二人で協力して食いつなぎ、使えそうなものを集めて道具を一から作った。

初めはテント暮らしだったが、長期戦に

なると踏んで、雨風を凌げる小屋も建てた。島の豊富な資源に支えられて、サバイバルを続ける内に生活自体はだいぶ安定してきていた。

ここは一体どこなのか。この島は一体どの星の上に浮かんでいるのか。

地球、月、関連する星系、思い当たる場所を列挙した。島の環境を観察し、文明の痕跡を探し、必死に現状を把握しようとした。

ここまでの流れは月での探索と基本的に一緒だ。だが今は、残念ながら雪とオレの知る土地、世界と結びつかず、時空の迷子となっていた。

なかなか終りが見えない。でもまだ、この島の全てを調べたわけじゃない。手筈を整えて海に出るという手段もある。希望を捨てずに、地道に日々探索を続けていた。

この暮らしを続けていられるのは……諦めたり投げ出したりせずにいられるのは――

オレはここでの暮らしが楽しくなってきた。食い物には困らないので慣れれば余裕を持つて暮らすことが出来る。欲しい物があれば作ることも可能だ。それは資源の豊か

さと、雪の知恵があつてこそだった。

一人で生きていた時よりも、他の人里離れた地にいた時よりも、遥かに多くの事が出来る自由度が高かった。雪は時折あれが無いこれが無いと不満げにするが、不自由のない暮らしをしていたからだろう。オレは今でも十二分に恵まれていると感じる。

気候は温かく穏やか。荒れる日もあるが、荒廃した地球や閉じ込められていた研究所と比べれば楽園のようだった。

ルイン達とはぐれてしまい彼らのことが気になってはいたものの、徐々にその思いは薄れて、追い詰められて戦う日々から解放されて、心が楽になってしまっていた。

何より大きかったのは雪の存在だ。浅からぬ縁があり、そしてまた長く一緒に戦ってきた大切な仲間だ。自分一人だったら生き延びることは出来ても、決して幸せではなかっただろう。

更に嬉しかったのは、雪が早々に人の言葉を取り戻したことだった。

地球塔でペガサスに変異してから、雪はペガのように人語を話すことは無かった。実際出来なかったのだと雪は言った。

それが話せるようになったのだ。ここに落ちたからか、それとも偶然タイミングが

重なったのだろうか。

話すことが出来なくても、一緒にいるだけで心強かったのに、話せるんだ。

普段は落ち着いているが、雪らしくそれなりに怒り、悪態をつき、喧嘩もする。そんなことが嬉しくてしようがなかった。時には探索しながらふざけて笑い合いました。言葉で意思疎通できることは、想像以上にありがたかった。生活を軌道に乗せるまでそう長く掛からなかったのは、雪と情報や知識を十分に共有していられたからだ。

■月■日

日中は探索をし、日が暮れたら拠点に戻って食事や雑用をする日々が続いていた。

夜はよく雪と一緒に眠った。地球塔で雪が変異してから、身を寄せ合って過ごすようになっていた。あの頃は硬いドルバン鉞の上で、今は藁の上で雪の隣に身体を横たえて休む。

今日はサンゴや布でベッドを一台作った。簡素だが、今までの寝袋と比べれば随分立派な寝環境が調った。マットの上にひとしきり寝っ転がって満足すると、夜更けにはいつものように毛布を持って雪の傍に向かった。

寝そべっていた雪は顔を上げて、耳を少し後ろに倒した。

「またここで寝るのか？ 折角ベッドを作ったのに、藁の上じゃ寝心地が悪いだろう」

「ベッドは使いたい時に使う」

横になって毛布をかぶると、雪は一度だけ鼻を鳴らし、後は何も言わなかった。

生き物のそばは居心地がいい。身体をくつつけると温かくて安心する。寝しなと目覚めに、艶やかな純白の毛並みを撫でるのも好きだった。

■月■日

目を覚ました時に違和感があった。隣の温もりに手を伸ばすと、いつものすべすべとした毛並みの感触が無い。けれど覚えのある触り心地で、まるで自分の腕に触れているような……

重い脛を上げると、そこにあつたのは純白ではなく白い肌、人間の体だった。目の前の光景がすぐには信じられなかった。

「雪……雪！」

がはつと起き上がり、思わず大きな声を上げてしまう。

「なんだよ朝つばらから……」
朝の光を眩しげにぎゅつと目を瞑り、眠

そうに答えてくる。

人間の雪の声だ……！

懐かしい……、口調は同じだけど、馬の時とは違う声、雪の声だ！

「本物だよな？ 本物の雪だよな？」

銀の髪、開かれた瞳から覗く鮮やかな赤。間違いないように無い、高揚が止まらない。

「ああっ？ なにワケの分かんねーことを、寝ぼけてんのか？」

「見ろ……手……」

雪の両手を握って目の前に持ち上げる。そこへ視線を移した雪は、目を大きく見開いた。

「これ、まさか戻って……？」

「ああ、手も顔も体も、全部人間に戻ってる！」

握られていた手を振り払う勢いで雪は飛び起き、壁に掛けられていた鏡の前に立つた。

「夕べまでは馬の姿だったのに……どうしてだろう」

「……俺にもさっぱりわかんねえ」

食い入る様に鏡を覗き込みながら雪が呟く。

「ただ……夢を見た。夢の中で人間に戻らなくて良かったんだ」

「夢が叶ったんだな」

「夢じゃねえよな？」

未だに信じられないという顔で笑いながら雪が振り返る。

「ああ、起きてるぞ、夢じゃない」

「ハハッ、また突然馬に戻ったりしねえといいんだけどな……………はあ……………」

心から安堵したような大きな息をついていた。

「そうだな、よかつたな……………本当に良かった……………」

「ああ」

雪の足取りはしつかりしていた。これから様子を見ながらになるだろうが、すぐにもどおり動けるような気がした。

良かった……………雪がこれほど喜んでくれた。良かった、だから良かったんだ。

……………少しだけ、白馬の雪への名残惜しさがあつた。強く凜々しく美しく、空も

飛べるペガサスの雪のことが大好きだった。それに加えてこの島で話も出来るようになったので、そのままの姿でも困ることは

なかった。角で戦う勇ましい姿も、もう見ることは出来ないのか……………

思いは尽きないが、人間でも馬でも雪は雪だ。この思いは胸の内にとまっておこつ

雪が人間に戻ったので、藁の寝床を撤去し、新たに家具を作り足して家の中を整理した。他にも入り用な物を揃え、雪はてきばきと自分の服を縫っていた。やはり蹄と人間の手では違う。力は落ちたが器用さは格段に上がって、ものづくりが捗るようになった。

日々の糧と脱出の糸口を得るための探索を再開し、山野を巡りながらこの島は不思議な所だと二人で話した。過ごしやすく、不思議な幸運が訪れる。

また何か良いことが起こりそうだと淡い期待が生じていた。

■月■日

晴れた日の夜、寝床へ向かおうとした時に1号に呼び止められた。

「今夜は星を眺めて過ごそう」

砂浜に二人で寝転がって夜空を見上げる。降り注ぐような満天の星だ。

「1号、おまえ天文や星座は分かるか？」

「いや、オレはあまり詳しくない」

「俺もまあまあだ。チュルホロ星系や地球、月から見える恒星や星座は覚えてるけど、こつから見える星空にはそれらしい物が見

当たらねえんだよな……………」

「そうか……………オレ達は大分離れた星に来てしまったんだな」

「どれぐらい離れてるかは分かんねえぜ、隣の星系かも知れないし、何億光年離れてるかも知れない……………あーあ、もつと真面目に天文、宇宙を勉強しとくんだったぜ。そしたら今の居場所の検討もつけられた……………かも知れねえ」

「雪の家族や……………あとはそうだ、ペガなら分かりそうだな」

「アイツは宇宙飛行士だったんだよな」

「懐かしいな……………」

「会いたいかな？」

「ああ、雪だつてそうだろうか？」

「どっかで無事でいてくれたらいいさ……………」

「星座か……………この星空にも、きつといくつも名付けられた物があるんだろうな……………あ、あれ！ 蛇使い座じゃないか!! ずっと前に雪が教えてくれたやつ」

「うん？ どこだ？」

「ほら、あの赤い星を先頭にジグザグしたところ」

「う……………ん、ああ、あれか。惜しいな、似てるけど違う。星の数が足りない」

「違ったか……」

「落胆すんな、今更だ」

「うん……折角だからオレはあれを蛇使い座と呼ぶことにする。他に何かの形に見えそうな星は無いかな……」

「想像を膨らませながら熱心に無数の星々を見上げ、1号は指で何やら空中に線を描き出した。

「フツ……楽しそうだな、好きにしてろ。」

「……ま、今どこの星にいるか分かったところで、ここで俺達二人じゃ宇宙船は造れねえし」

「確かに宇宙船は無理そうだな、でも海がある。目指すのはあっちだ」

波打際を指差して見せる。

「船ならこの島でも資材を集めて作れる。」

「ここ以外の陸地を見付けたいよな。航行計画、必要な物資の準備、どこに向かうか、どのタイミングで引き返すか。雪はそういうのは得意だろうか？」

「得意って程でもねけど、まあ、なんとかやれる」

「雪は色々知っていて頼もしいな」

「おまえとは得意分野が違うんだよ。……先ずはおまえが乗っても沈まない船造りからだな」

1号は見かけ以上に重い。体格は俺と大して変わらないのに、体重は常人の二倍以上ある。怪生物故というやつだ。

「設計は頼む。力仕事は任せろ」

「ハハッ、そりゃいいや」

明日も頑張ろう

早く故郷に帰りたい——

そんな思いを胸に星空を見上げ、静かに

時が流れて行く。

1号はこの空に何を思っているのだろうか。

「ここがどこかは分からないけど……星空はきれいだな」

沈黙はひっそりとした声で破られた。

「ああ、晴れた日の夜は最高だ」

1号の言葉に心の底から同意していた。思うようにならなくとも、未だ帰れなくとも、空には変わらずに星がある。こうして

過ごしていると、ただその美しさに魅せられる。

「雪と一緒に見ることが出来て、良かった

……」

波の音に紛れるような小さな呟きが聞こ

えた。

頭上の方でザツ……と砂が擦れる音がする。体を起こし、傍に膝を着いて顔を覗き込

んでくる。星の光が1号の影に隠れた。

「ん……もう戻るか？」

問いかげには答えずに、1号は唇を重ねてきた。

「!!」

一瞬目を見開いたが、心も体も抗おうとはしなかった。酔狂だ、自分も1号も……

微睡むように瞼を閉じて、もう一度キスをした。

「さ、戻ろう」

差し伸べられた手を取り立ち上がる。

握り返されて繋いだ手はそのままに、す

ぐ近くの住処まで二人で歩いて帰った。

■月■日

毎夜のこと。

雪が人間に戻ってからも一緒に眠ることが多かった。もう習慣になつていたし、なんとなくそうしなくなり、藁の寝床に横になるのと同じ感覚で、新しく作った雪のベッドに潜り込んだ。

始めの何度かは「あっちへ行け!」「自分でここで寝ろ!」とすげなく言われたが、繰り返す内に諦めたのか無言で壁の方に寄りようになり、オレは機嫌よく空いた所に横

になった。

馬の頃からこうしていたのにどうして雪の態度が違うのか疑問だったが、実際にしてみると言葉にしがたい違いというか、新鮮さがあつた。

思い返せば人間の雪と寝たことは何度もある、月で野宿をしていた頃だ。と言ってもこんなに近くはなかった。お互い警戒も緊張もあつたし、無理もない。

一人用のベッドは二人で寝るには狭くて肩や腕がぶつかった。それがあつたかくてこそばゆくて楽しかった。

雪は暑い、鬱陶しいと時々不満を漏らしたが、眠れない程ではないらしい。そう時間が掛からずに言葉は途切れ、安らかな寝息が聞こえ出すので、オレも隣でとろとろと眠りに落ちていた。

その日の体調や気温次第で一人で眠ることとはあるが、オレのベッドはあまり使われないなかつた。

今夜も雪の寝床にいた。ゴロゴロと横になり、とりとめのない会話が弾んでいた。灯りを落とすのも忘れて夜更けまで話し込んでいる内に、何が切つ掛けたか。ちよっかいをかけられて、こちらも手を出

して、ふざけてじやれているうちに唇が重なつた。じわじわと顔が熱くなる。

「二度目だな、キスするの」
出てきたのはあまりにもそのままで、意味の無いような言葉だった。心が上擦つて

いる。
雪は「おや？」とでも言うように眉を上げて、若干嘲るように笑つた。

「三度目だろ」
「え？……この前星を見た時が初めてで、今で二度目じゃないか？」

「その前！ 俺が寝てる時にしてきたら」

「あつ………気付いてたのか……」

「俺が気配に気付かないでも思つたか！ それになあ、てめえの体重考えろ！ ちよつと身体がぶつかっただけでもそれなりに衝撃なんだぜ」

「気付かれていたならばと、雪には正直に打ち明けることにした。」

「あの時は、寝返りを打つたらぶつかつてしまったんだ……」

また雪は眉をぴくりと動かして笑う。
「なあんだ、ワザとじゃなかったのか、そーかそーか」

思わず雪の肩を掴んでぐつと詰め寄る。

「わざとの方が良かったのか？」

「さあてね」

「雪は何も言わなかつた、怒らなかつた」
「眠くて面倒だつただけだ」

愉快そうに、機嫌が良さそうに笑つて答えているが、どうにもものりくらりと躲さ

れている感じで意図が読めない。
「オレはあの後一晩眠れなかつた。胸がざわついて……」

「そりゃあ寝不足になつただらうなあ」
受け答えに焦れつたくなつて語調が強くなつた。

「今はわざとしてる！ 雪とこうしたいからしてるんだ。雪はどうなんだ!？」

怒りとは違うが、答えが欲しくて堪えられない。きつと今のオレは険しい顔をして

いるんだらう。
「フツ………クツ……アツハハハツ………」

「たたく不思議な奴だよおまえは………つてそうか、1号、おまえは人間でもなけりや完全に作り物の怪生物でもねえ、中途半端の出来損ないだもんな。そりゃあおかしいよな」
笑われて変に気が抜ける。雪のこんな言い方はよくあることなので、さほど気になりはしない。けれど不可解だ、何を言いたいんだ。

「俺がこれだけ許してやっつてるってのにさ、鈍いにも程があるぜ。いちいち言わなきゃ分かんねえのか？ それともワザと言わせようとしてるのか？ ……いや、おまえにやそんな芸当は出来ないか」

雪がどんどん一人で喋って、だんだん置いてけぼりにされているような気分になってきた。もうどうでもいい、もっと仲良くしたい。

再び唇を寄せようとしたら、突然バチン！という音とともに頬に衝撃が走った。

「ッ……！」

咄嗟に瞑った目を開けると、左右の頬を挟むように両手で叩かれていた。そのまま顔を掴まれ動きを止められる。

「雪、何を……」

「おまえさ、長いことここで俺と二人つきりになって……俺しかいなくて、他に誰もいなくて、他人に飢えてんだよ。人恋しくなってるんだろ？ おまえは仲間ができてその味をしめちまったんだ。だから俺なんかを相手に変な気を起こしてるんだよ」

俺なんか……それはオレ達の過去の因縁を指しているのだろう。お互いに恨んで殺意を向け合っていた過去を、雪はいつだって忘れていない。勿論オレだって……

「全部じゃないけど、雪の言う通りかもしれない。雪がいるからさみしくない。それに一緒にいるんだから、仲違いしているよりも、好きで上手くやって行けた方が良い」

「そうだな……このド正直野郎!!」

一喝した後に視線を落とし、雪は再び顔を上げた。愉しそうで少し情けなさそうな、あまり見たことのない笑顔だった。

「俺だって人のことは言えねえな。飢えまくつていい加減目が眩んじまつてるから、おまえなんかとこんな事をしてるんだ」

身を乗り出してきた雪に唇を奪われた。

嬉しくて、それが全てに思えた。言葉も理屈もどうでも良くなった。夢中になって何度も口づけを交わした。途中でチラリと目を開けて見る度に雪の顔は赤くなつていき、とても楽しかった。

キスしながらいつの間にか身体を撫でられていた。脚も絡ませてくる。オレは雪に抱きつくくらいしか出来ないでいたが、雪は……違う。

指先が、てのひらが、肌の上をするすると滑る。頬から耳をなぞり髪の中に差し込まれる。うなじを辿って首筋を降りて、鎖骨を掠めて胸の上へ。肩から腕をしばらく往復し、背に留まるとお互いうっすらと汗

をかいていたのか、手のひらがはりつくようだった。

どこをどんな風に触られても心地よさしか無い、もつと触って欲しい。

脇腹をぐるりと撫でてまた雪の手が前に戻り、臍の周りとお腹の辺りでぐるぐるとお遊ばせた。その先は……

「1号、期待してんだろ」

見透かされてクスクスと笑われた。笑い声が間近の空気を振るわせて体に染み入るようだった。

素直に頷いてその先を求め、オレも雪に触れた。

その晩雪を抱いた。完全に余裕をなくして止まらなくて、オレは良い思いをしたが、やり方が強引で乱暴で雑だと、後でこっぴどく叱られた。ただ、行為自体は拒絶されず、「最初だから許すが、二度目は無いと思え」と釘を刺された。

明くる日の晩、「教えてやる」と体中に様々なことをされた。初めてのことばかりで衝撃の連続だった。抱かれて溶け合うような感覚を味わい、すっかり虜になった。それから雪との関係にのめり込んでいくことになる。

■月■日

「1号っ！ 最近慎重過ぎやしないか!?」

「海の上で何日も過ごすんだらう、もし水や食料を失ったら……」

「海が怖いのは分かっている。だからしっかりと準備してるし、船だって荷物を積んで俺達も乗って、何度もテストしただろう!」

「でも海は荒れる、危険だ……」

「荒れない海なんてあるか! 陸にいたって天候つてのは荒れるんだ」

「嵐で船が転覆するかもしれない、大波で放り出されるかもしれない……」

「だーかーら! 救命胴衣を用意してやっただらう、浮き輪もあるし船と離れないようにロープとロックも付けた!」

昼日中の照りつける太陽の下で、これまで何度目かになる口論を今日もしていた。船を出し、この島から脱出する計画についてだ。浜辺で、二人で作った船を指さしながら雪は激高する。

「計画通り準備を進めてきただろう! それにおまえが後から心配だの欲しいだの言った分も随分追加した」

「おまえ準備を積極的にやっていたじゃねえか! それなのにここんとこ……チツ、最初に決めた脱出予定日からただけ過ぎた

と思ってたんだよ!」

「何が気に入らないんだ! つーか、どうすれば納得するんだ! いつまでもおまえが渋ってちゃ事が進まねえっ!!」

雪の畳み掛けは続く。

言っていることは至極真つ当ではつきりと反論できない。けれど雪が気に入る返事もできない。言い争いになるたびにオレは思いつく限りの不安点を並べ立て、いつも喧嘩になっていた。

雪が思っているように、オレは海が怖い。元から溺れることは大嫌いだ。それに陸から遠く離れて沈むようなことがあれば命に関わる。これはいくらでも遠慮なく言える。実はもうひとつ理由を抱えているが、雪には言えない……

脱出したくない、そんな思いが心の片隅に存在している。

勿論、脱出したい気持ちはある。元いた所に戻るためという正当な動機があるのだから、むしろこちらがメインのはずだ。そのためにも今まで協力して必要な物を用意してきた。

でも、ここに居続けたいという気持ちも消えず、捨てられず、日増しに育って大きくなっていった。相反して、目を追う毎に雪

は苛立ちを募らせていく。そして、ぶつかっていた。

「雪は早く戻りたいんだよな」

何を当然のことを?と睨め付ける目が言っていた。

「戻ってどうするんだ?」

「どうするって……それが目的だろう」

「戻ってからどうするか聞いてるんだ……」

……シキはルイン達を裏切った」

この話題にはあまり触れないでいたが、ずつと気になっていた。雪の怒気が消えて、かわりに冷たい視線をこちらによこす。

「そもそも味方じゃねえだろ。兄さんは帝国の人間なんだ、あいつらと共闘はしたけどな」

「利用だろう?」

地球塔上層部の中核室で何が起きたか、逃げた先の塔地下でルイン達から聞いた。

シキの目的はヒルトン炭坑への挑戦権獲得だった。そのためにはキューブとコンタクトを果たす必要があったが、人間には不可能だった。

シキはルインが人間ではないことを見抜きたのだという。

ルインは異次元から来た者で、元の世界

では猫だった。この宇宙に來た時に何故か人間の姿になつたらしい。

キューブ接触まではシキの目論見通りだったが、誤算があつた。挑戦を許されたのは『人間ではない者』ではなく、動物と人間の亜種、亜人と呼ばれる者のみだつた。

結果、その場にいた唯一の亜人であるルインにキューブの力が与えられ、それを許さなかつたシキは、ルインを殺してでも力を奪おうとした。

……もしシキが当初の狙い通りに力を手に入れていれば、ルインの役割はそこまで、命を狙われ追われることも無かつたかもしれない。しかしシキが力を得たらどうなつていたか、それもまた知る由もない。

「今更おまえがそれを言うか？」

雪の言わんとすることは分かる。オレは元被験者で身を持つて知つていたからだ。押し黙るオレの前で雪は言葉が続けた。

「兄さんは人を傷付けようとか、悪意で動いているわけじゃない。異常戦争の話はおまえも聞いただろう？」

「目的以外はもういいだけだ……」

「……大事を成そうとすれば犠牲を伴う。あの帝国の機関なんだ、恨みなんて山どころじゃ済まないさ。それも覚悟の上で兄さ

んは動いているんだ」

空模様が変わり日が翳つた。強い日差しでじつとりとこいた汗に海風が吹き付け、体を冷やす。

「分かつていても付いて行くんだな……」

「ああ、それが俺の生き方だ」

互いの声が硬く冷えていく。

「どこまで知つていたんだ？」

「全て……とは言えねえな。ルイン達のことは、そうだな……戦力の確保、地球塔の案内役、それから仲間に引き入れて反乱分子を抑えるため、そんなところだろうと俺は思つてた。間違つちやいねえと思つけど、兄さんの考へていること全てが分かるわけじゃない」

空は見る間に厚い雲に覆われ、ぽつぽつと雨が降り出した。

「戻つたら兄さんに話を聞くさ。答えてくれなくても、付いて行けばきつと分かる時が来る」

「そこまでシキを信じているんだな」

「ああ、これだけは一生変わらない」

おかし……こんな話をしたかつたはずじゃないのに。

「もしシキが、帝国が破れていたらどうする？」

「ふざけるなっ!!」

雪の怒声が響く。眉間に皺を寄せて、ギリギリと食いかかるような眼差しを向けられる。

望んではいないし考へたくもないだろう。でも雪なら、その可能性が決して無くはないことを分かつている。オレ達が地球塔から姿を消して、かなり時間も経つた。珍しく痛いところを突かれて、怒りを露わにしていた。

「そんなことは今考へてもしょうがねえ……とにかく戻ることだ。戻つてみないと、何がどうなつているかも分からねえだろ」

雨に打たれて、雪が言葉を吐き捨てる様を見て、徐々に平静を失つていた。苛立ちか、悲しみか、よく分からない。もやもやする。

「おまえは地球塔に戻つたつて、あの一行に戻りたくなきや戻らなくなつていいんだぜ。そもそも戦争とは何の関係も無えんだ、行き掛り上参加することになつただけだろう。逃げ出そうが抜けようが、好きにすりゃいい」

「雪は戻つて戦うんだらう？」

「だからつておまえがそれに合わせる必要はねえ」

さつきから微かに胸が痛む気がする。

「……………おまえはどうしたいんだ？」
すぐに答えが思い浮かばなかった。

さつき同じことを雪に問いかけたと、ぼんやりと思いつく。希望を明確にしないで、答えも早かった。雪の行動原理の基本中の基本なんて、昔から嫌という程よく知っていたじゃないか。

自分もどうするか考えなくてはいけない……………

そう思いながらも、感情が揺れてうまく頭が働かなかった。

■月■日

一人で林に来ていた。普段は二人で探索するが、今朝は雪と大喧嘩をしてしまった。雪が崖に行くと言いつ出した。しかしそこには獐猛な生き物が数多く巣食っている。奴らとの戦いでオレは深手を負って、動けなくなると言うことが度々起きていた。戦闘中は強烈な攻撃を食らうから余裕が無いのは分かる、雪だつて一撃で倒されてしまうこともある。だけどこちらの余力も少しは考えて欲しい。そう言つたら「自分で注意しろ！」と。

「無理しないで近場で食料を集めればいい

じゃないか！」

「金属や希少素材が足りないんだよ！」
そんな調子でエスカレートして手が出る足も出るの喧嘩になり、やがて論点がずれていき、最終的にはいつもの脱出するしないという話になって、派手にやりあつてしまった。

雪は怒り心頭で飛び出して行き、オレも仕方なく探索に出た。……………もう昼だ、腹が減つた。

とぼとぼ歩いていたら視界が開け、意外な光景が目飛び込んできた。

「うわっ、なんだこれは！」

日没の頃、寝室から雪の驚く声が聞こえた。先ほど帰つてきたようだ。先に戻つて家の裏で資材の整理をしていたオレは、すぐに部屋へ向かった。

雪は自分のベッドの前で立ち尽くしていた。足音に気付いて、こちらは見えないままベッドを指さして言う。

「なんなんだ……………これは？」

「摘んできた」

「ああ、おまえがやつたんだよな、この大量の花……………こんだけあるとすごい香りだな」

シートを覆い尽くさんばかりの色とりどりの花からやつと視線を外し、雪がぐるりと振り返る。

「ん……………おまえからも香りがする？」

首元に鼻を寄せてくる。やわらかな銀の髪が頬に当たる。吐息の音は全く立てないのに、肺を広げ肩が僅かに動く様を見ると、頬が緩んだ。

「山の麓に行つたら、湿地に群生していったんだ。見渡すかぎり一面に咲いていた。摘んできた分はまだあるぞ」

部屋の片隅に置いた大カゴを指す。中には集めた花々が山になっていた。

「それで香りが移ったのか」

「だろうな、それにさつき食つた」

「食うのか!？」

「なかなか食えるし腹も膨れる、蜜だけでもどうだ？」

カゴの中の花を一つ取り、萼を外して雪の唇に差し込むと、怪訝な顔をされた。

「毒はねえんだろうな？」

「平気だと思う、たくさん食つたけど特別おいしいことはない」

「うん……………確かに蜜は甘くてうまいな、ガキの頃の遊びを思い出すぜ」

自分はさつき食べて気に入った黄色の肉

厚の花を取り、萼を外して雪と同じように蜜を吸う。

「それも食えるやつか？」

雪に吸わせたのは濃いピンクの違う種類の花だ。黄色の花をくわえたまま頷く。……と、雪がすつと近づいてきて花びらの端を食み、そのまま奪われた。しゃくしゃくと噛んで飲み込むと眉根を寄せる。

「うーん……出廻らして感じだな、苦いし、俺は蜜だけ吸ってる方が良いや」

味の好みはそれぞれだ。

「で、どうして俺のベッドをこんなにした？ この一角だけ見りゃ、どこのリゾートホテルかって思うぜ」

そう言うって、こちらを横目で見ながら笑う。

肩を押してそこに座らせ、押し倒す。自分も乗り上げて雪の体を跨ぎ、シートに手と膝をついて見下ろした。下敷きになった花が潰れて、香りがいつそう濃く漂った。

「ハハッ、分かりやすいなおまえは」

雪の左腕が上がり、頬に触れてくる。「前から思ってたけど狭いよな、もつと広いベッドを作ろうか。もう分けてる意味もあんまりねえし」

「いいな、でも今のも残しておきたい」

「ま……あつた方が便利だな、その前に置き場か」

「家の拡張だな」

「住環境を改善、拡充させてどうすんだって話だよな。永住するわけでもねえのに」
「でも生活レベルを落としたくはないだろう？」

「それはいやだ！」

話しながら枕元にあつた花をいくつか摘んで、雪の髪に差した。

「なーにやっつてんだ？」

可笑しそうに果れ顔で見上げてくる。

「これは……トツピングじゃなくて、なんだったかな」

「デコレーション？」

「そうだ、飾り付け」

「俺の頭は生け花の土台じゃねえっての」

白銀の髪に鮮やかな花の色がよく映えて、いい雰囲気だと思えた。傍に転がっている花を次々に髪に乗せていく。

「なあ……自分の姿が見えねえんだけど、

かなりお目出度いことになっていないか？」

「全然おかしくないぞ、雪の髪は良いな……」

……

「そうか、雪は自分の顔が見えないのだ。」

ならオレも花を飾ろうと考えた、そうすれば雪にも見える。

白い花を手にとつて自分の頭につけようとしたが、滑つてぼろぼろと落ちて上手くいかない。何度か失敗すると、雪が見かねて別の白い花をオレの耳の上に挟むように軽く押し込んでくれた。

「これでどうだ？」

「落ちないな！」

「形の選び方の問題なんだよ、これなんか行けるんじゃないか？」

細長く尖つた花を選んでオレの髪に差し、五つ、六つ辺りまで来たところで雪は吹き出した。

「クッ……やっぱりおかしいじゃねえかつ！」

「オレはおかしくないと思うんだけどな……」

……

二人共、朝の喧嘩が嘘のように和やかだ。

「雪とこうしたら楽しいと思つたんだ」

「こう……って、花飾りか？」

「いいや、それだけじゃなくベッドに花を飾つて雪と過ごしたらだ、良い香りだ……」

「おまえの『良い』つてのはうまそうない香りってことだろ」

「食べなくても良いと思うぞ」

「どうだかなあ」

雪の上着に手をかけ、ボタンを上から順に外し始める。

「つたく、食欲と愛欲を混同させてやがる」

折角お膳立てしてくれたんだ、このまま1号の好きにさせてやってもいいんだが……

ちよつとした思い付きがあつて、ボタンを外されている途中でベッドから降りた。髪からばらばらと花が落ちて、床に散らばる。

「したくないのか？」

中断されて思うところはあるだろうに、相変らずの薄い表情だ。

「いいや、珍しい状況だから楽しませてもらうおうと思つてさ。夜は長いんだ、遊ぼうぜ」

1号をベッドの中央に仰向けに寝かせて、いくつかの注文をつけた。目を瞑らせ、胸の上で手を組ませ、喋るなど。

刻々と夜は更けて、窓の外は闇の色を深くしていく。1号の全身を照らし、触つて倒す心配の無さそうな位置に燭台を移動させる。

準備は整つた。カゴから両腕で抱えるほ

どの花を掬い取り、1号の周りに、体の上に、ゆつくりと置いていく。顔の上だけは残していたが、耳元に置いた時に反応してうつすらと瞳を開いた。

「ひんやりする……どうなってるんだ？」

「目え瞑ってる」

片手で左右の臉を覆いそつと押さえる。再び閉じさせて、静静と花を積み続けた。

やがて出来上がったその光景に溜息がこぼれた。

「よく出来た……カメラがあれば記念に撮つておきたいくらいだ」

「オレは死体役なのか？」

言いつけの通り目を瞑つたままだが、感触や姿勢、物音などで察したらしい。ご名答。

「ああ、棺の中のな」

「オレを殺したのか」

「よく喋る死体だ……いいじゃねえか、実際最期はこんな風に送つてもらえるか分からないんだぜ」

贅沢なごっこ遊びだ、こんなに沢山の生花に埋もれて幸せだと思え。……我ながら本当に良い出来栄えで満足した。

「よし、もう起きていいぞ。『エリス』」

聞こえている筈だが、瞳を閉じたまま動

かない。

「どうした？ 呪文を唱えたんだから復活しろよ」

「キスしてくれたら起きる」

「……フーン、おまえの口からそんなネタが出てくるとはなあ。文学的な素養があつたなんて意外だ」

どうしたものかと迷つた。付き合つてもいいし、起きないというのならいたすらしまでも頑なに起きずに、眠つてしまいうだらうか。

思案を巡らせて、今日は言うことを聞いてやるか、というところに落ち着いた。こういうシチュエーションではどうすりゃいいんだつたか。無難に触れるだけか？

ベッドの傍らの床に膝をつき、顔を近付け頬に手を添え、結んだ唇を押し当てた。

「目覚めさせてくれてありがとう」

「喋つてたじゃねえか」

空色の瞳に自分の影が映る。

「えーと……」

何かを思い出すようにしながら、1号は俺の両手をとつた。

「あなたは運命の人だ、結婚しよう」

「はあつ？ ……1号、色々すつ飛ばした

なあ」

「こういう話は結ばれてめでたしめでたしなんだろう？」

「まあ」

あまりにも顔色を変えずに話すのだ。遊びの続きなのか、それともどこまで本気なのか分からない。そもそもこいつは、恥じらいなんてものは持ち合わせていなかった気がする。顔を赤らめることはあるが、恥ずかしいとか照れているのとは違うな、高ぶっている時だ。そういう奴だ。

ベッドの縁に腰を下ろすと、1号は身体を起こした。二人して顔を見合わせる。

「で、何の童話のつもりだったんだ、眠り姫か？」

「白雪姫だ」

「そっちか……じゃあおまえが姫役？」

「どうだろう……雪の方が合っていないか？」

「名前だけで言ってるだろ！ 起こしたの俺だ」

つい反射でカツとなった。

「ちよつと待ってろ!!」

言い捨てて飛び出し、食料庫からりんご一つを手に部屋に戻った。

「食え！ これでおまえが姫だ！」

強引に口に押し付けると、1号は何食わぬ顔で紅い果実に歯を立てた。花の香りに甘酸っぱい香りが弾けて混ざる。

ところが、途中で食べるのを止めてしまい、手で割って半分をこちらに寄越した。

「雪も食うか？」

「おまえの齧りかけなんかいるかよ」

「さっきはおレの食つてた花をとつたじゃないか」

「あのなあ、あんだだけ大量にあるのになつや二つで……りんご、もう要らねえのか？」

「ああ」

「さっき沢山食つたつて言つてたつて……しょうがねえな」

捨てるのもなんだし、この後に備えて栄養補給になるか……そう思つて手のひらに受け止めた。

「思い出した、確か物語の王子は死体愛好家だぞ」

食べ始めたところで唐突な話題を振られる、りんごを取り落としそうになる。

「そいつはマニアックだな……」

「オレが死体でも欲しいか？」

「縁起でもねえなあ……そんなときや丁重に葬つてやるよ、そこで忘れるまで覚えてお

いてやる」

「やつぱり要らないよな、もしそうならよろしく頼む」

こちらをまじまじと見つめて、1号は更に聞いてくる。

「死体でも欲しいつて、誰かをそんなふう

に思うことはあるか？」

「………無いな、死体になんかさせない」

「気が合うな、オレも同じだ」

なんとなく空気がまずい。不快なんじゃない、ただ、あまり真剣にされるとはぐらかしたくなる。

「つーかさ、さっきの話、死体好きつてんなら、生き返つたら用無しだろう。絶対興味無くすつて！ おかしいじゃねえか」

「でも雪はおレを死体役にして起こそうとしたぞ、起こされる側は嫌だつて言い張つた」

「関係ねえ、んなこた考えてなかつた！ 途中からはめえの妄想だろうが！」

これでいい、こんな風にバカな話をしていれば。

今にも笑い出しそうになったところで、ふつと部屋が暗くなった。二人同時に燭台へ視線を向ける。燃え尽きた蠟燭から立ち昇るひとすじの白煙だけが残っていた。

「替えを持ってくるか……」

倉庫へ向かおうと立ち上がりかけると、腕を強く引かれた。

「いらぬい」

バランスを崩して背中から倒れこんだ。

1号の膝の上に仰向けになったようだ……まだ暗闇に目が慣れない。

折角の花の豊かな色彩が消えたが、部屋に満ちた香りと、手に当たるとしっとりとした薄くやわらかな無数の感触が、存在を主張した。

顔を温かいものが触れる。1号が星の明かりを頼りに鼻筋と頬を撫でてきた。するがままに任せたら指先で唇を探り当て、その上に留まって暫くなぞり続けていた。

「気持ち良くないか？」

声が降ってくる。

「んん？」

「前に雪がこうしてくれた」

「ああ……そんなこともあったな」

「オレはくすぐったくてぞくぞくしたんだが、雪はどうだ？」

「特にそういうのはねえな、拭かれているみたい……」

「何が違うんだろう……」

「技術の向上に努めようってのはいいけど

な……」

薄暗闇の中で、1号の顔は影になって見えない。自分の指先ですら、辛うじて輪郭が捉えられるくらいだ。けれど問題無い、何度も触れて体が1号の形を覚えている。

「手本だ」

寝転んだまま迷いなく左腕を上げ、唇をついと撫でてやると1号は途端に反応した。

「相変わらず良い触り心地だ、荒れてないな」

指先で突付いて口を軽く開かせ、濡れた粘膜の手前、表面の乾いた部分の際を、触れるか触れないかという力加減で刺激する。

「……はあ……やっぱり……じわじわする、なんて言ったらいいんだろう」

肩がぎゅつと縮こまり、かすかに震えていた。

「分かるだろ？ そつとやるんだよ」

「うん……もう一度してみる」

親指を使って、先程よりずつと軽く触れられる。少なくとも拭かれているという感じはしなくなった。さっきのも愛撫だったんだろうが……当然嬉しくはあるのだが。

「……さっきより良くなってるぜ」

「痺れている感じは？」

「しないな」

「オレは雪の指が離れたのに、まだじわじわしてる」

なんとも悩ましそうだ。拘らなくなつていいのに、可愛気のあることをする。

「指の腹じゃなくてさ、指先や爪を使ってみる。やりやすい指でいいから、唇で軽く触れるようなつもりで」

1号は親指から人差し指に変えた。そつと撫でられ、上唇を指先が掠めた瞬間に痺れて軽く息を呑んだ。

「今の感じだな？」

嬉々とした声だ。

「やりやあ出来んじゃねえか……」

要領を得たのか、唇を程よくいじられ続けて思いの外全身が辣み、腰の辺りにも込み上げてくる気配を感じた。

こういうことをされるとだんだん酔ったようになってくる。ただでさえ暗い中で視覚に訴える刺激が少なく、その分他の感覚が鋭くなっているんだ。

それにいつもと違うこの香り。なかなか好みて癒される。鼻腔と肺を満たされ、全身が甘い空気に浸っているみたいだ。

ぼんやりと考えながら身体を投げ出し、快さに委ねていた時間は不意に破られた。

「んぶっ！」

口の中に指が入ってきて、驚いて咄嗟に噤んでしまった。止めるのが間に合わず、舌の付け根を突かれてむせそうになった。唸って口を開けると1号は指を引き抜き、噤まれた辺りを舐めた。

「なにすんだいきなり！」

「唇で触れるようにするんだよな？ 雪は口の中に突っ込まれるのが好きだろう？」

「突っ込むって……もうちよつとマシな言い方が出来ねえのか……ま、好きだけども」
「オレは雪の好きな事をしようと考えてる」

随分と殊勝な心掛けのように聞こえる。

いや、聞こえるのではなく実際に――

1号は自分本位で衝動的で、これはお互い様なのだが、それでも最初の頃と比べればずつと俺の反応を見ているし、良い思いをさせようとしてくれている。想いが伴っていると分かるから楽しくて応じるし、俺からも近付いて触れるんだ。

噤んだ指を軽く掴んで引き寄せ、手のひらに指先を滑らせる。

「うあつ……」

震えた声を小さく漏らす様が面白い。掴んだ右腕を更に引き寄せ唇で触れるだけの愛撫をする。目を瞑り、手首からテーピン

グの上を辿って肘にかけて、じりじりと指先を進ませていく。1号が体を強張らせ、時折びくりと震えるのを背中を感じる。

「また、ぞくぞく、する……雪の手が、熱

くて……腕しか触られていないのに、体が

疎む……。指先から、何か、じわじわする

波が出ているんじゃないか……？」

なかなか色気があったのに、最後の部分

で笑いのツボにはまった。楽しい、可笑し

くて楽しい、反応が楽しい、触れ合って過

ごすのが楽しい。今度は肘の上の素肌、内

側のきめの細かい部分を念入りに触れてや

ろうか。

しかし、この辺りが限界だったらしい。

1号はどうとう耐えきれずに膝を立て、俺

は胸の上に倒れ込み、押し潰されそうなほ

ど強く抱き締められた。体温と鼓動が一气

に伝わってくる。

「フン……相当キテンな。いつもみたいに

がつつきやいいじゃん、今日はどうした、

おまえらしくもねえ」

「ゆっくり過ごしたいと思っただ、でも

……うん、そろそろ堪えられない……」

丁度いいタイミングだった。煽られているのは自分も同じだったのだから。

■月■日

ある晩、1号が耳元で囁いた。「ずつとこ
こで、二人だけで暮らすのもいいかもしれ
ない」と。

睦言だと思っただけ聞き流そうとしたが、そ
れは恐らく本心だった。脱出せずに今のま
まの生活を続けたいと、ずつと思っていた
のだろう。言葉尻を曖昧にしながらも、と
うとう1号は吐露したので。

脱出を渋る理由に挙げていた1号の水嫌
いはよく知っている。この前も夜中に海で
溺れてパニックを起こし、「二度と泳がな
い！」と泣きそうになっていた。気分が良
くてうっかり泳ぎに誘ったのは俺の失敗だ
つたが、それはともかく。

1号は大量の水が嫌いだ。生まれてから
ずつと培養液の中にいたから、嫌な思い出
や閉じ込められる悪いイメージになってい
るんだろう。

その上やたらと重いから水中で沈みやす
い。もし海に落ちれば逃げ場はなく溺れて
終わりだ。

俺だってそんな目に遭いたくはない。け
れど勇気を出して踏み出さなければいつま
でもこのままで、どこにも行かれない。

そんなことは1号も承知の上だろう。現

に、最初は脱出計画に意欲的に取り組んでいた。

様子がはつきりと変わってきたのは俺が人間に戻り、更に時間が経って島での暮らしにすっかり慣れた頃だった。

行動を共にすることが多く、ましてや一つ屋根の下での暮らしだ。こんなことが長く続けば、まるで家族になったみたいじゃないか。慣れるとそれが当たり前だと感じるようになる。

俺自身、住む処があつて一緒に暮らす奴がいれば安心する。1号にとつてはもっと特別な筈だ。俺の過去には当たり前にあつた家族との生活だが、1号にはそんな過去も思い出も無かつた。知識でのみ知っていたのだから。

研究所を脱走してから、逃げて隠れて生き延びて、仲間ができてからは戦争状態。

それが今はどうだ。居心地が良く、暮らしにひどく困ることもなく、戦争も無ければ俺達ももう争つてはいない。まさに平和、平穏そのもの。

かといって飽きる暇は無い。日々動かなければ生きて行かれないし、島には未知が多く残っている。充実感と面白みのある暮らしとも言える。

あいつがどんなにここを気に入っているか。まるで憑き物が落ちたようにのびのびとして、元々正直過ぎちゃいたけど前にも増して素直に、喜怒哀楽を、全ての感情を、弱さも情けなさも隠さずにさらけ出す。そんな姿を見ていると痛いほど伝わってくる。この島の良さは俺だつて感じている。1号との暮らしも随分楽しくなつた。時には夢中になつて、調子に乗つてしまうこともある。

でも、このままじゃだめだ。俺は帰りたい、兄さんの所に戻りたい、それは勿論だ。だからつて俺一人が帰ればいいつてわけじゃない。仮にそれが出来たつて、おまえがここに残りがつたつて、置いて行きたくなんかない。いや……違う、そうだけどうじやない……………

ここには他に誰もいない。もし一人になつたらどうする、何が起きていつまで生きていられるか分からないんだ。もし気持ちが変わつたらどうする、幸福な日常がある日を堺に牙を剥くようになるかも知れない。昔無常なんだ、俺達だつてそうだろう。昔と過去と今と、どれだけ関係性を変えてきたことか。

1号は世間知らずで、きつと幸福に慣れ

ていない。日々の楽しさに舞い上がつて、このままずっと続けとさえ思っているのかも知れない。

何かが起きてからでは遅い、他の人間がいればどうにかなる……可能性が拓ける。

まだ二人とも五体満足で動ける内に脱出したい。万が一、一人になつたら出ようつたつてより難しくなる。

今が幸せつてのは、最悪ずつと出られずここで一生を終えるようなことがあつた時に、その思いを抱けていたなら多少は救いがあるつてくらしいの保険だ！

今に意味が無いとは言わないが、目的を見失うな、1号。

■月■日

海に海月、真珠、サンゴなどを集めに來ていた。昼過ぎまで探して周り、午後の陽射しが和らいだ頃、棧橋に腰を下ろして海を見ながら休んだ。

材木を集めて作つたこの棧橋に、島の外から船が来ることはただの一度も無かつた。

近場での漁に使う小さなボートと、脱出のために用意したもう少し大きな船だけが停められていた。ボートは使い込まれ、大きめの船は何度か海に浮かべられたが本来

の目的のためには未だ使われず、作りたてのようにきれいなままだった。

しばらく二人共何も喋らずに、青く輝く海をただ眺めていた。風と波が穏やかで、静かに繰り返される音に包まれていると心が無くなっていくようだった。

「なあ……」

声の主、雪はオレの斜め後ろに座っていた。

「いい加減覚悟を決めないか……」

この島から脱出する気はないか、何度も繰り返された問い掛けだ。

「俺だけ戻りたいって思っていてもしようがねえんだ」

声は静かであるいつものように怒ってはいなかった。落ち着いている分、その思いは強く聞こえた。

雪はずっと戻りたいと望んでいる、早く戻りたいと望んでいる。でも決して一人で出ていこうとはしない、オレが同意して行動に移すのを待っている。

——ふと疑問が沸き上がった。

「雪にはオレが必要なのか？」

「ああ、必要だよ。だから脱出するために協力しろって、前から散々言っただろう」「雪からそんな言葉を聞けると思わなかつ

た……」

「おまえが言わせただろう」

雪が言う必要と、オレが雪に対して必要だと思ふ気持ちとは多分違う。雪の目的は脱出で、そのためにオレの力が必要だと言っている。それでも……

「一人でこの島を出る気はない、元々そんなことは考えちゃいない」

はつとなつて振り返る。

「当然だろう？」

こちらに一瞥をくれると、遙か遠く水平線に視線を移した。

「ここを出たつてここで暮らした日々はなかりはしない。どんなに良い事だろうが悪い事だろうが、過去つてやつは決して消えることなく、積み重なっていくんだ」

まるでひとりごつのように話していたが、どこまでオレの気持ちを分かってくれていただろう。

そうだ、雪は仲間だ。それさえ忘れずに行けば、この島から抜けだしても、どこに行つても、たとえ離れることがあつても、きつと大丈夫だ。

雪と過ごした日々は本当に楽しかった。人生の幸せすべてがかけ集められたようだった、十分過ぎるほど楽しんだ。

ここに来るまでの日々とあまりに違つて、信じられないくらいだった。思い返せば本来の自分の人生とはかけ離れているようなことが常ではないような意識もどこかにあつた気がする。

「分かつた……この島を出よう」

ようやく決意できた。雪はオレの目を見ながらゆつくりと頷いた。

「それでいい、おまえの仲間がおまえを待つてる」

雪の言葉はオレを力づけた。

■月■日

脱出を決断した次の日、珍しく雪が降つた。

昨日までは温かかったのに、明け方から冷たい風が流れ込んで、空に白いものが舞い始めた。

日中、船に異常がないか確かめに、何度か浜辺へ足を運んだ。白い砂の上にもつと白い雪がうつつすらと積もり、海の上に落ちては溶けて消えていく光景が珍しく、つい立ち止まって眺めていた。その都度雪に促されなければ、飽きずに一日中そこにいたかもしれない。

探索は控えて、家の中で作業や脱出の打

ち合わせをして過ごし、夜には雪がご馳走を作ってくれた。今日はオレの誕生日だった。雪は覚えていて、祝ってくれた。

肉や魚を使った手の込んだ料理にケーキまであって、どれもとびきりうまかった。腕によりをかけて作ってくれたことがとても嬉しく、動けなくなるほど腹いっぱいになるまで食った。

もうすぐこの島を出るが、これからも雪の作った料理が食べたい、一緒に飯を食べていきたい、そう思った。

■月■日

脱出を数日後に控えた朝、大きな地震が発生した。家は潰れなかったが家具の幾つかは倒れ、倉庫の中身も崩れてしまった。その日は1号と島の様子を見て回った。船と棧橋は無事だ、家の周辺施設も概ね問題は無い。平原や林も変わりない。

山間まで足を運ぶと、景色が変わっていて愕然とした。山の裾の一部が崩れて、剥き出しになった山肌は白銀に輝いていた。

一度拠点に戻り、備えをしてから再びそこへ向かった。足元に気を付けながら進み、幸い揺り返しは起きずに現場まで辿り着くことが出来た。

目の前にあるのは白銀の壁だった、土砂が崩れて覗いた部分だけでも、横巾百メートルは下らない。

「金属みたいだな、持って帰って資材に出れないか？」

得ても知れないのにガンガン叩いて、1号はのん気に言う。

「切り出さないと無理だろう、この大きさを……てかこれ何だ、建物か？」

機械か建物か、それとも別の何かか。白い硬板の表面を土を払いながら調べていると、四角い扉が見付かった。こじ開けると、見覚えのあるような機械と内装が目に入る。

「宇宙船……みたいだな」

「これはハッチか」

「多分……」

1号の問いに曖昧に答える。この船自体に見覚えはないが、帝国の船と似通ったところがある。侵入し、周囲を警戒しながら勘を頼りにコックピットを探した。

船内は荒れてはいないが風化していた、恐らく長く人の手が入っていない。船の姿勢は正常で傾きはほぼ無く、歩いて回るのに困らなかつた。ヘッドライトを装備して

探索すること十分ほど、目的の操縦室と思しき場所を発見した。

室内を照らしてくまなく調べていく。デザイン、計器に刻まれた文字、内装、見知った名前の数々。そしてさつき見た外装……もしかすると、という思いはやがて一つの確信に至った。

「おまえと探索していると、つくづく思いもよらない物に行き当たると……」

1号と月の洞窟でキューブ発掘跡を見付けた時の事を思い出しながら呟く。

「何か分かったのか？」

「こいつは伝説の歌劇船VIRGINだ、知ってるか？」

「名前を聞いたことがある」

「俺も実際に見るのは初めてだ、まさかこんな所で会うことになるとはな……この船は祖父が作ったんだ」

「ヴァルディ竹原博士か？」

「そう……だいぶ昔にな。こいつにはAIが搭載されてる、起動できるか試してみる」

すうと息を吸い込み、暗く沈黙するモニターに向かつて呼びかける。

「VIRGIN、生きてるか？ 応答しろ」

音声反応は無く、二人で待っている間、そこには静寂しかなかった。機械音の一つ

も聞こえなかった。

「動かせないか？」

1号が控えめに聞いてくる。

音声では駄目だ。帝国船の知識を頼りに暫く手元のパネルやスイッチを操作したが、反応はなく、虚しく時間だけが流れていった。

思い付く限りを試し尽くし、声を潜めて待つていた1号に向き直った。

「残念だがお手上げだ。眠っているのか死んでいるのかすら分からねえ、俺の知識じやどうしようもねえ……。自分の不勉強を悔いるぜ、せめてリーダーが使えればな……」

「もう少し起動を待つてみないか？ 人がいれば反応しないか？」

「んん？ 待つてもどうだろうなあ……長い間放置されて、エネルギー切れになってるっぼいぜ」

「この船の中をもっと調べたい、使えるものもあるかも知れないだろう」

確かに一理ある、落ち込んでいてもしょうがない。気が紛れるだろうし、伝説の船には大いに興味を惹かれていた。

「……そうだな、ひと通り歩きまわってみるか……けっこう広そうだぜ」

「大丈夫だ、食うものは持つてきてる。いつそ今日はここに泊まらないか？」

「ああ……う……ん？ また土砂崩れが起きて入り口が塞がれたら、洒落んなんないぞ？」

「そうだったらシヨベルで掘ればいい、それでもダメならダイナマイトで」

「ナメてんな……ま、地震が起きないことを祈るか」

通路を歩きながら、今や伝説となつていこの船について話していた。かつては宇宙一と名高い歌姫ディアナの歌劇船であり、銀河をめぐるその歌声が響き渡っていたこと。歌声に魅了された観客で劇場がいっぱいになっていたこと。

広い宇宙の中で船の姿を見掛けられただけでも幸運であり、その時代VIRGINは幸せの象徴だった。

「だからこの島の暮らしは幸せなのか……幸運が訪れるのか」

話を聞き終えて、1号は溜息をついていた。生きやすいのも、俺が言葉と人間の姿を取り戻せたのも、もしかしたらこの船の力によるものなのかも知れない。

「でも、おまえにとつちや俺の一族のやつ

てることなんて、みんな悪魔の所業に思えるかねえ」

「うん、創り出した者と使う者は違う、創られた物もまた違う。どう使われるか、生み出されたその後次第だ」

兵器、船、宇宙を横断する装置……祖父や科学者である家族が生み出したものは数えきれない。1号もある意味その産物の一人だ。

元は人間で両親がいたが、生まれる前、胎内にいた時に母親が絶命した。1号も脳死状態に陥り、俺の母さんの手によって怪物と融合させられなければ、今こうして生きてはいない。

皮肉な話だが……1号の話は自らの生き方についても語っているようだった。

「ここは雪と縁がある島だったんだな……」

「この部屋は……？」

壁に掛けられた何本ものパイプを1号が奇妙な顔で眺める。

扉の開いた一室に入ると、中には過去にここを使っていた者の痕跡が残されていた。机の上には古びた日記帳が置かれていた。手に取って崩さないようにそっと開き、書

かれた文字を辿っていく。

ページをめくり、噂に聞く帝国皇室面々の名を見付け、またしてもとある知識と符合する。

「1号、この船は曰く付きというか、長い冒険の歴史がある。最初は歌劇船として活動してたけど、その後宇宙怪盗の船になっていたこともあるんだ」

「怪盗……有名な奴か？」

「有名も何もな……怪盗プリンス、一時代を築いた大怪盗さ。現在行方不明、ジスマの兄だ」

「えっ……もしかしてピツ9が師匠って言うってた奴か！」

「会う度に主張してたよなー、聞いてもいねえのに」

「でもあいつは凄いやつだぞ、どこにでも一人で現れるし、知識も多くて侮れない」「確かに凄いやつだ、あれはマニアみたいなものだろ、って今はあのチビの話をしてるんじゃないやねえ！」

その界限には疎いらしい1号に、宇宙怪盗の歴史を聞かせた。パイプについても、その年毎に成果を上げた怪盗団に、協会から贈られる名誉の証なのだ。金銀銅に白金と、誇らしげに壁に飾られたパイプたち

は、長い年月が経っているだろうにその輝きは失われていなかった。

「……で、プリンスの怪盗団には、執事と護衛の人型怪生物と、王子の友人と一緒にいて宇宙家出をしていたわけだ。ちなみにその頃、科学研究所の俺の母さんが、この船について技術提供していたって話だぜ」

「家出なのに帝国の支援が？」

「そう、親公認の家出ってやつだ」

「過保護だな……」

「過保護っつーか、それなりの身分になると常に監視下に置かれているっていう方が合ってるかもな」

船内を歩き回っていると、あつという間に時間が流れた。船を動かそう、何か使える物を見付けようという気持ちには鳴りを潜め、気が付けば好奇心でいっぱいになっていた。

折角だから伝説の歌劇場を一目見たいという話になり、方々歩き回ったが残念ながら見付けられなかった。格納式になっているのか、それとも後に改修されてしまったか。

夜になり、居住区の一室で食事を取り休むことにした。腹を満たし、壁に背を預け

て並んで床に座る。

「本当に不思議な縁だな、雪の爺さんの船か……」

「ああ……」

短く答えたのは、1号が感慨深そうにしていたからだ。祖父や両親に縁のあるものはこの宇宙にいくらでもある。しかし水を差すのもなんだし、自分自身、船と出会えてとても嬉しかったのだ。

「この船を見たいと思う人は、きっと今でもたくさんいるんだろうな」

未だ感動に包まれたような横顔を見て、喉まで出かかった言葉をのみ込んだ。迷い、躊躇う。

視線に気付いて「どうした？」と見返される。

「……俺だけじゃないぜ、この船はおまえにも少なからず縁がある」

「オレはこの船を見るのは初めてだぞ？」

「やつぱり知らねえか」

知っているかいないかは賭けだったが、いずれにせよ既に切り出したのだ。拒まれるまでは続けることにする。

「1号、地球塔で言ったよな、復讐はやめにするって」

答えを待つ間、1号の射貫くような視線

を受け止めていた。

「ああ、ジスロフに言った。縁があるのはオレじゃなくてオレの親か？」

俺が頷くと、すぐにはつきりとした口調で求めてきた。

「聞かせてくれ、大丈夫だ」

俺が思うより1号の精神は強いのかもしれない、そうであることを願う。

「どうしても嫌だつてんなら途中でやめるけど、できるだけ最後まで聞けよ」

そう言い置いて、1号の親世代のある事件について話し始めた。

何十回と繰り返された先代后妃ナナ誘拐の内の一つ、無人島立て籠もり事件。

首謀者は、1号の父親の双子の弟、当時のチュルホロ科学研究所副所長、及び研究所所属の初代人型怪生物の三名。

要求は、帝国に后候補として連れ去られた1号の母親と、后妃の身柄の交換。

母親については1号も知っている通り既婚であり、後に分かったことだが1号を胎内に宿していた。

先代皇帝ジスロフが后集めをしていた頃は、年齢性別種族既婚未婚、あらゆる条件を問わずだったという。皇帝自ら見初めた場合もあれば、執事や部下たちが見繕って

きたケースもあったらしい。どちらかは分らないが、とにかく母親は候補となった。

地球に住む彼女のもとに送り込まれたのが先の人型怪生物で、妻を守ろうとした1号の父親と交戦し殺害している。

怪生物は皇帝の命により、科学研究所で製造された。

全ての怪生物の製造責任者は帝国科学部門主任であり、研究所の所長でもあった俺の母親。副所長は母さんと共に、事件の人型怪生物を担当していた。また、1号の叔父とは交友関係があった。

ここまでを聞いて、1号は誘拐事件と動機について理解したようだった。

「オレの叔父という人は、母さんを取り戻すために事件を起こしたんだよな？ 科学者と怪生物は帝国から離反したのか……かなりジスロフに近い立場だったようだけだ……」

「そう、謀反だから重罪だ。たとえ后妃が助かったって、極刑は免れなかっただろうな」

1号は俯いて押し黙る。

「続けるぞ、ここからがこの島に関わる話だ。おまえもそろそろ察しているんじゃないかと思うが、この無人島、VIRGIN

がその事件の舞台だ」

ゆっくりと顔を上げた1号は、驚きと不可解さを表情に浮かべていた。口元は縮まらず、何度か瞬きを繰り返す。

「VIRGINなことは確かだが、当時の島と今の島は同じものじゃない」

「待て、どういうことだ……。島？ 宇宙船？ よく分からなくなってきた」

「順を追って言うと、VIRGINは最初は歌劇船だっただろう」

「うん」

「その後、チュルホロ星系のとある星に墜落したんだ、そんで島の土の中に埋もれた」

「今の状況と似ているな」

「ああ、その墜落した時の島が誘拐事件の舞台。事件を機にVIRGINの所在が明らかになって、土から掘り返された。商人や愛好家の手に渡り、プリンス達に盗まれて彼らの船になった。再び宇宙を飛び回ってたってことだよな。更にその後、怪盗団一行を乗せたまま行方不明になった……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

の間に何があったかは分からねえが」

「よく島に潜りたがる船だな……」

「おまえの感想はそれでいいのか？」

「いや……壮大で掴み切れていないんだ」

「とにかく、過去におまえの母親を救おうとしたやつらと今の俺達は、理由は違うが同じVIRGINの上で暮らしていたことになる」

「雪……教えてくれ、オレの叔父達はどうかだった？」

「ここまで来て言わない訳にはいかないな……。結局帝国に無人島は見付けられた。

皇帝自ら出向いて后妃は保護されて、おまえの叔父たちは最後まで抵抗して戦ったらしい」

「あのジスロフ相手にか……」

「そんなだけの覚悟を持って事を起こしたんだろうよ……。最終的に怪生物が相打ち覚悟で自爆しようとしたけど、皇帝にはバリアで傷ひとつ付けられず、島にいた三人は助からなかった」

「そう……か……」

それだけ眩くと、室内は重い沈黙で満たされた。二人共何も言わず、ただ肩を並べて空を見つめていた。

「母さんは目の前で父さんを殺されて、帝

国に着いてすぐに自害したって聞いた。多分、事件を起こしても取り戻せなかったんだろうな……」

実際そうだっただろうから、言えることは何も無かった。

「それでもオレは……」

「1号……」

言葉が被る。1号が口を噤んだので、俺は続けた。

「真相は分からねえしこんな事を言っても何にもならないかもしれないけど、おまえが脳死状態に陥ったのは妊娠約三ヶ月だ。研究所の資料に記録が残ってる。その時期じゃ母親に気付かれない可能性があるぜ」

「……ありがとう、雪」

涙を零す1号の頭に手を置いた。慰められるような立場じゃないんだが、今だけは許せ1号。

ピンクの髪に手のひらを沈ませるように何度も撫で、じんわりと伝わる熱を感じていた。

1号は両手で顔を覆いながら項垂れて、長い息を吐き出した。俺の手は自然に落ちて、背を撫で、肩に置き直した。顔を覆っていた手をぱつと離し、1号は気持ち振りを払うように首を横にふるわせた。

「オレが知っていたこと以上に悲しい犠牲があったことも悔しいけれど、戦ってくれた人たちにありがとうって言いたい」

「まったく出来ないって話でもないかもな……」

少し赤くなった瞳が振り返る。

「おまえの父親は輪廻転生の因子を持ってただろう？ その双子の弟、叔父も同じだ。運が良けりやどつかで転生してる。転生した奴は親でも叔父でもないだろうが、もし出会えたらどうする？ 意味があるか無いかを決めるのはお前だ」

黙したまま1号は熱心に耳を傾けていた。その目には少しづつ力が戻ってくる。

「それから怪生物な、自爆した時にこの船のプログラムと干渉して、AIが融合したらしい。そんな時の状態のまま残ってりや、船を起動出来れば話せる。科学者は難しいか……」

「可能性があるんだな……」

「ああ、ゼロじゃない」

「ん……？ その怪生物は叔父にとつて身内の仇じゃないのか？」

「そうだな」

「それが一緒に事件を起こしてこの島で過ごしていたなんて……」

「おまえも知つてのとおり、怪生物はたいした意思は持つていない、権利も自由も無し。基本的に帝国つーか皇帝の命令に従つて動くだけだ。それをおまえの叔父がどこまで割り切つてたかは分かんねえな。つて思うと科学者もなあ、帝国と友人の間で板挟みだつたらうよ。ただ、面白い……つていうのは不謹慎か、まあその怪生物は自我を持つてたそうだ」

「自我？」

「人間に似た主体的な感情や意識つてことだ、おまえにもあんだろ？ ……ハッ、すつげー興味深そうな顔してるぞ」

「ああ、知りたい。三人と后妃が何を思つていたか、どんなことを語つていたのか知りた。その怪生物と、VIRGINと話がしたい……！」

怪生物、帝国に背いた者、憎しみを抱いてもおかしくない相手と共に戦い過ぐすと……1号は自らの境遇との重なりに、興味を引かれていたようだった。それにさっきも言つていたように、感謝を伝えたいんだらう……

「悪いな、起動させられなくて」

「ううん、雪が気にすることじゃない」

1号の顔色が変わつてほつとしてきた。

両手を頭の上で組んでうーんと伸びをする。

「明日まで待つても船が動かかなかつたらさ、最初の計画通りに島を出て、人のいる所にとどり着いて、それからまたここに戻つてしようぜ」

「雪、頭が良いな……！」

心底感心した様子で瞳を輝かせる。

「おまえと比べて言われても、当然過ぎて馬鹿にされてる気分だぜ。そうだな、兄さんを連れてこよう。兄さんだつたらきつとこの船を起すことが出来る。御祖父様のことを誰よりも尊敬してるから、喜んで来てくれるはずだ！ 戦争が終わつて落ち着いたら、この島にまた……あ……！」

「どうしたんだ、変な顔をして？ オレもそうしたい、雪の意見に賛成だ」

「ああ……思い出しちまつた、ここに来て結構経つてるだろ。戦争がどうなったのかなんて、兄さんはどうしてるんだらう……」

考え出すと途端に不安で心が狼狽える。

こと兄さんに関しては俺は弱過ぎるんだ。

「雪、前に言つていただらう。シキに会つてついで行くつて。戻つてみないと分からないつて。戦争なんか関係ないんじゃないか？」

「たまには良いこと言うな、1号……。ま

つたくそのとおりだ。俺の言つたこと、よく憶えてたな」

「オレも雪の記憶力に驚いてるぞ。VIRGINの歴史もそうだし、オレや両親のことまであんなに詳しく、全部頭の中に入っているなんて。もつと早く言つてくれればよかつたのに」

マズイ、つい喋り過ぎた。

「なるほど……な。そんじゃ、どつかに記憶違いや怪しい所があるかもな。気になるなら自分で確かめろ。俺が知つてるのは、帝国軍所属で、科学研究所にもずつと通つてたからな。後は世間一般で知られてる話とか、そんなもんだ！」

過去に、普通じゃ手に入らない情報もあの手の手で散々調べたことがあるのだが、本人の目の前で言うなんて気不味過ぎるし悔しいし、言つたら言つたで今のこいつには妙に喜ばれそうなので絶対に黙つておく！

「だいたい、こんな話いつするつてんだ、タイミングも無かつただらう」

「？ オレはいつでも構わないが……聞けて良かった。色々教えてくれて、ありがとう……。それにしても、オレと雪は親の代から縁が深かつたんだな」

「直接的じゃねえし、良い縁とは言えねけどな」

「確かにひどいしろくでもないな。でも今の雪との縁は、とても良い縁だと思ってる」
1号の頭を力任せにぐいっと押し下を向かせた。

「てめえのそういうところが嫌いなんだ」

「そうなのか？」

心の中で盛大に舌打ち一つ。嘘だよ、分かれ！ つつーか聞くな！

長く一緒に過ごして、不意打ち直球には慣れたつもりだったが、時々まともに食らつてやられてしまう。そもそも俺の人生、そういうことは言われ慣れちゃいないんだ！

こうなると本心や甘い言葉なんてものはますます言い難くなつて、言えるか！ 言つてやるもんか！ と意固地になる。俺だつて気分が乗つてりや言えるんだけどな………してる時とか………思い出したら顔が火照ってきた。だめだ………！

いつまでも真つ直ぐに覗き込んでくる視線に耐え切れず、1号のこめかみに額をぐつと押し当てた。

■月■日

空は晴れ渡り、波は低く穏やか。良い風が吹いている。出立には絶好の日和だ。

長かった無人島生活とは、ここで一旦お別れだ。今日、目の前に広がる大海原へ船を漕ぎだす。

■月■日

旅の果てに水平線に黒く細い影を見付けた。海風に乗って船は進み、やがて広大な陸地が目の前に姿を現した。

近づくにつれ、建物が見え、煙突から立ち昇る煙が見えた。あれは街だ、きつと大勢の人間がいる。二人で必死に船を漕いだ。

「人影が見えた！ 雪、もうすぐだ!!」
息を切らせながら振り返ると、そこにいた筈の雪の姿が忽然と消えていた。

「雪………?」
何が起きたのか分からなかった。海に落ちたような音は聞こえなかった。

「どこだ………雪っ!!」

気が付いたら真つ白な光景の中にいた。

洋上で船を漕ぎ、眼前に陸地が迫つてもうすぐ迫り着けそうだったのに。そこへ降り立ち、帰る路を模索しようとしていたのに。

手に握っていたオールは消え失せ、足元には船もなく青い海もなく、どこまでも雪原が広がっていた。

右手には水があつた。向こう岸が見える、池か湖だ、海じゃない。大地に穴を開けたような漆黒の色。かといって石油やコールタールのように粘度が高いふうでもない。岸辺に寄せる小さな波は、普通の海や湖と変わらなかった。

近付くと、黒く透き通った水の中で、無数の小さな光が瞬いていた。まるで星空を覗き込んでいるようだった。

一体何がどうなっているんだ？
ここはどこだ。
俺は夢でも見ているのか。
それとも気でも失つてここまで運ばれたのか？

1号は………?
ギユ………と雪を踏みしめる音で意識が引き戻された。
混乱と動揺を即座に抑えつけて振り返る

と、間近に青い人間とも獣ともつかない者が立っていた。こんなに近付かれるまで気付けなかったなんて不覚だ。襲い掛かってくる気配はないが、慎重に身構える。

人間の子供程の背丈で、二本足で立って、服を着ている。しかし頭と手足は猫そのものだ。

猫人か？ 猫か？ 何者だ……？

訝しんでいると青い猫は口を開いた。

「□□□□へようこそ」

言葉は通じそうだ。

「なんだおまえは……1号は!？」

何のことだか分からないようで、ぐりつとした大きな目でこちらを見ている。名前を知らないだけかも知れない。説明と対話を試みる。

「ピンク色の髪をした、俺と似たような背格好の半裸の男だ。ここにいなかったか!？」

「君一人だよ」

「そんな……」

嘘をついてるのでなければ、こいつは知らないようだ。参った……

僅かだが期待した手掛かりは掴めず、尚もこちらを興味深げにジロジロと見られて、だんだんムカついてきた。

「その鎖術の腕を見込んで、君には今日からここで働いてもらう」

「はあっ!？」

青い猫はさも当然のことだとも言うように笑っていた。周囲には他に誰一人として見当たらなかった。

「マジかよ……」

こうして、新たな妙な世界での日々が始まってしまった。

帰れる日は来るのだろうか――

END